
魔法少女リリカルなのは 転生したのはスピリット！？

ネガティブ妄想者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 転生したのはスピリット！？

【Zコード】

Z5619V

【作者名】

ネガティブ妄想者

【あらすじ】

やつてしまつた。でも後悔はしていない。
……嘘です。後悔しますごめんなさい。

見たい人は見てください

第1話 輸生？…………あひそ（前書き）

やつひまつました。

でも後悔はない。反省はしている。

……嘘です。後悔も反省もしてます。『めんなれ』

第1話 転生？……あつそ

「わあ、今から貴様を転生させ　　『ふつ……』

俺、青柳元春あおやなぎとよはるの死んで最初の行為は神を殴る事だった。

まだ神を殴る数時間前。俺は普通にカードゲームをしていた

高校生にもなつてカードゲーム？
と言われたが俺は関係なくやっていた。

「メテオ・バルムでアタック！」

「ま、負けた……」

勝率はまあまあで今のバトルも俺が勝つていた。

「ふう……さすがに連續は辛いな……もつ帰つてすこし寝ようかな？」

そう考えたのが間違いだったと今なら思つ。

帰り道。俺は公園で楽しそうに遊ぶ子供も達を眺めていた。

楽しそうだなと眺めていたのも束の間、一人の少年がボールを追いかけ道路へ飛び出した。

一台の車が走ってきている時に

俺は危ないと思い、駆け出した。

間一髪の所で少年の背中を押して車との接触を防いだ。

だがその代わり、俺が思いっきり吹っ飛ばされた。

「がつ……く、……あ……」

地面に叩きつかれ、カードがバラまかれる

カードを回収しようと、立ち上がろうとするが体に力が入らない。

俺はここで死ぬのかな……

まだカードゲームで遊んでいたかつたな……

そう思いながら俺の意識は途切れた。

気がつべと何故か白い部屋のよつなかに立つた。

「…………」

そして田の前には腕を組んで俺を哀れんだ田で見てくる爺さんがいた。

誰だ?と聞くと神と答えた。

「…………」

「…………えつと、すまぬ」

お互い黙つて見つめ合つていると神が喋り出した。

「何で謝るんです?」

「いや、貴様が死ぬのは間違いじゃつたからな…………」

は?間違い?

なら……

「本当はあの子どもが死ぬ予定だつたと?」

「いや、それも間違いじゃ。本当はあんな事態になるのが間違いな
のじゃ」

え?……つと、つまり?

「実はわしのミスでこんな事になってしまったな。おまえは死ぬ必要はなかつたんじやが……すまんかつたな」

といあえず理不尽に死んだ時にしたい事ベスト一をじぶんと思つ。

「まあ、やすがに間違いで死ぬのはかわいわいじやから転生させてやうう！」

神がなんか言つてはいるが俺は無視して拳を握り、力を込める。

「ああ、今から貴様を転生させて『ざつけんなーー』『じふつー』

俺は神の顔面に拳を叩き込んだ。

おお、いい感じで決まったな

そつ思つてはいるがようよう立ち上がつた

見た感じかなり弱つてゐるな……

「うおい！何故殴つた！？痛かつたぞ！？」

「神よ…………知らないと思つが俺の知つてゐるアニメには理不尽に死んだら神を殴るといつ鉄則があるんだ。俺はそれを全うしたまで」

「どこのうううじや……」

「おお、この神、知つてやがつた

「それより転生じゃ……行き先はランダムで決めるからの？」

「了解した」

殴ったし、それでもいいや

「んじゃ、願いを3つ言え。出来る限り叶えてやる」

「どこの竜の玉の龍だ」の神は……
それにしても願いか……なら……

「バトルスピリットで知ってるか？」

「あのカードゲームの事か？まあ、知らぬこともない」

知ってるのか……なら

「ならヴルムと名の付くスピリットに変身する力とそのスピリット達の力が欲しい。」

「カードバトラーとしては変身してみたいし、変身だけじゃ物足りないし」

「わかった。次は？」

次は……

「思いつかないな……」

「取り消すか？」

「でもそれは惜しい。
だったら……」

「転生する時はこの姿のままでいい。この姿で生きていきたい」

「イケメンにしてやるが、まあ今もそんなに悪くはないが」

「自分からリア充になる気はないから。俺は流されて生きるタイプ
だし」

「勿体無いの……」

「ついでいわ。

最後は……」

「生きてた頃の記憶を消してくれ。今の記憶は消さなくていい」

「貴様、本当に変わり者じやな」

「だつて転生した後カードゲームしたくなつたら困るじやん。だつ
たら消した方がマシ」

「もう……それもそうじやな。なら転生後は生前の記憶がなによつ
にじとくぞい？」

「頼む」

「これで俺のカード欲が消えるな。」

「あ、一番最初の願いじゃが…………ちと時間がかかる部分があつたわい。

だから最初に使えるのはジークヴルムだけになつそうじゃがいいかの？」

「いいよ。後から段々使えるのが増えるんだよね？」

「もうじゃ」

「ならOKだ」

別に困る程じやないし……

「ほいじゃ…………そうそう転生をせるかの」

お、そろそろか……

ん？どう転生をせられるんだ？

「んじゃ…………グッドラック」

パチン、と神が指を鳴らすと俺の足元に黒い大きな穴が空いた……

つて、ええー？

「だがしかしー！」

ぱしつ、と穴の端に手を掛けた。

だけど……

「早く行かんか」

げしつ、と手を蹴られた。

「何つー? 木いいい あああつーーー!」

どつかのロココのよつな叫び声を上げて穴へと落ちて行った。

神 side

「ふう、やつと行つたか」

全く……誰が 原じや、誰が……

「しつかし面倒な願いをきいたのを……せん……あやつはざの世界に行つたかの?」

何々? リリカル? なのは?

……ざまあ

「ならデバイスで変身できるよつとじーつかの……

神 side end

第一話 輸生？……………あゝそ（後編）

やつひめひつた……

では――！

第2話 転生完ア！第一遭遇者は車椅子の美少女ー？（前書き）

やつひまつたパート2

ちなみにタイトル通りあの人出ます。

ではどうぞ。

第2話 転生完了！第一遭遇者は車椅子の美少女！？

「フエノキ!! ああああ～～～～!!」

俺は今、背中から落ちている。

なぜかつて？

前回を見てくわ。

それで急補がなくてない

「...」ウルルル

しかしそんなに高くなかつたのか、
軽く背中を強打して呼吸困難で済んだ。

いや、そんなに軽くないけど

「げほつ！」

「どうしたん? 大丈夫?」

つ
！
？

聞き覚えのない声が聞こえた！？

だけど苦しくて目を開けられず、見えてないでいた。

「くつ…………ほあつ…………」

苦しい思いをするのを覚悟して、
変な掛け声と共に起き上がった。

「きやつー！」

「ぐうう…………い、痛い…………」

かわいらしき悲鳴が聞こえたが
今の俺には振り向いてる暇がなかつた

「えへつと…………一応聞いとくけど…………大丈夫？」

「大丈夫じゃない…………大問題だ…………」

多分かなり涙目になつてゐるだろう。
かなり涙声になつてゐる。

「ほんなら家に入る？」

「…………お邪魔します…………」

誰だか知らぬが親切だ。

そう思いながら顔を上げる。

目の前には栗色の髪のショートヘアに×の形の髪飾り?をして
車椅子に乗つてゐるかわいらしき女の子がそこにいた。

「私はハ神はやて。ひらがなではやてや
おかしぃやる?」

俺達は今、テープルに向かって自口紹介をしていた。

「いや、おかしくないよ。

俺の名前は青柳元春

元氣の元に春と書いて元春

「ほんで元春、何でこんなとこにいたんや?」

「こんなとこ、とこのは

実は落ちたところがハ神さんの家の庭だったのだ。

ハ神さんは俺が落ちてきた音を聞いて駆けつけたといつ。

車椅子で無茶すんなよ……

「実はも何も気が付いたらいいにいた……しか言えない」

「ふ~ん、まあ、ええわ」

「おろ? 以外に追及してこないな?
まあ、好都合だが……

「で、この辺りに住んどるん?」

……ヤバス…… 実は俺……嘘つぐの苦手なんだよ……

「『』めんなさこ。』の辺りの事全然知らないし、

『分他の所はまつたぐ』存知ないです、

考えた結果、素直に喋った方が楽と思い、素直に白状する。

……嘘は良くないもの…

「そんなんじうじうでいい……まあ、ええわ

そんなら元春は行くと』が無いんやな?」

うおっ、いきなり呼び捨てか!?

別に構わんが

「うそ、微塵もない」

「堂々と『』事ちがうそと想つたやナビ……」

「まつまつは 自分、バカですか!…」

「自分でバカつて『』て悲しくないんか?」

悲しい? HA HA HA……はい、悲しいです。

「行くとい無いんやつたら……家に住まへんか?」

「へ? (・□・)」

「なんやその顔……いやなんか?」

いやいやんな訳ないが……その……な?

「いいのか?車椅子に乗ってる女の子がこんな不得体の知れない男と同じ屋根の下で暮らして?」

「自分で言つてホンマに悲しくないんか?」

……でもそんとこは大丈夫や。元春は変な事する人には見えへんし」

遠回しにへタレって言われてね?俺

「それに家には私しかおらへんし……」

「…………」

やべえ……氣まずくね?

俺つてばこいつこいつ暗いのも駄目なんだよーー!

何か……この空気を明るくする方法は…………やつだつ……

「八神さん!」

「?」

名前を呼ぶと八神さんは顔を俺に向ける。

今だーーー!

「(ーーー)」変な顔

- 1 -

スベツたああああ！――

o
r
z

レ
ミ
ツ
W

h
?

良かつた。なんとか笑つてくれた。

そう思いながら俺は八神さんの頭を撫でる。

「本当にここに住んでいいのか？」

うん。ええよ？ その代わりちゃんと働いてもらうで？」「

そんな事は百も承知だ

なほ……よほじくお願ひ申す
ハ神わん」

卷之三

え？

「もう家族なのに名字で呼ぶん?」

やつこの事ね。

いきなりの言葉で理解できなかつたが
よつやく理解した。

「えじや、改めてよひしくな?」はやい

「うそ、よひしや

うつして俺はハ神家で暮らす事になつた。

〔元春　さ・く・し・ゆ・う〕

〔神　し・ん〕

「えへっといひがつになつて?..

わしは今、あの小僧の「バイス」とやらを呪つてこた。
神だから魔詞不思議な力でわくつとやねばよいこじやない
つて思つやつもおるだじやうつが

わしつてそんなになんでもできる方じやないのじやよ

.....

確かに全知全能の神ならこんな事は簡単じやうがわしせわつち系
の神じやないからのお.....

「よし、できた」

なんとかデバイスを完成させる。

ちなみにインテリジョントデバイスじゃ。

後は機能とA.I.がちゃんと正常に起動するかどうかじゃが……

わしはデバイスを起動させる。

『.....』

……あれ? 失敗したかの?

『.....あなたが私のマスターですか?』

「い、い、喋るぞ!」

いや.....まあ、成功したら喋るのは当然なんじゃが.....

「いや、違つて。それよりどうじやへど」かおかしな部分はな
いかの?」

『あなたの顔と体型がおかしい以外は何もありません』

「のやうの.....いや、このデバイス.....かなりむかつく.....

「わしの外見では無く、おまえの事を言つとのじやが.....」

『それは問題あつません。全システム正常です』

「"スピリットシステム"もか?」

『はい。問題なく発動できます。

……ジーク・ブルムと

のみですが』

まあ、そこの所は仕方ない。

他のスピリットはとある事情で時間が掛かるからの
はわしからのお節介みたいなもんじゃし……

「他のスピリットは後からで良い。それらに変身できるだけでもいい
はずじゃからな」

『はい。で、私のマスターは何処に?』

「大丈夫じゃ。ちゃんとあいつの元へ送つてやる。

……あいつの世界の宅配便で」

『あなたは本当に神様ですか?』

「わしが神つてわかつてたんかい。
といつか

「どいつもこいつもわしが何でもできると黙つてるらしい」のあ

『それはあなたが神様だからですよ?』

「まあ、良いわ。

んじやタイミングの良い時におまえをおまえのマスターの元へ送
るからの」

『了解しました』

デバイスの返事を聞き、わざわざのタイミングで送るのが良いか考
え始めた。

〔神 side end〕

第2話 転生完ア！第一遭遇者は車椅子の美少女ア！？（後書き）

はやての言葉とかその他もうもうこれでよかつたかな？

何かあれば感想ください。

そつこく編集しますので。

では。

第3話 八神家一団 「止めて、はやて一庵の「まほむつ無こよー?」（前編）

はつはつは。

この小説もここまで来るとはすがすがしい。

タイトル通り? 元春が八神家に住んで一団の日常を書いてみた。

ではどうぞ~

第3話 八神家一日目 「止めて、はやてー俺のレアはもう無いよー。」

元春 side

俺が八神家の一員になつて初めての朝。

カーテンの隙間から注がれる日差しで俺は目が覚めた。

目覚めた俺は隣に人の温もりを感じた。

布団を捲るとそこには……

すやすやと眠るはやてが俺の腕に抱きついていた。

110番に電話をかけようとすると人！

待つてくれ！おれば無実だ！

昨日の夜にはやてに

「一緒に寝てくれへん？」

つて言われたから寝てるだけだ！！

俺だつて何でか聞いたけど……

「ええやん。家族なんやし／＼／＼

何回聞いても顔赤くしてこればつかだつたんだ！！！
信じてくれー！！

「うひ俺は誰に言つて訳してんだろ?」

とつあえず今日まじの街をはやくに案内してもうひ付定だ。

今の時間は 10時か…………ふるふる起きなこと血腫落になつ
ひまつから起りやすか……

「お~い、はやく起れ~

体を揺すつて起らうとする。

ちなみに触つてるのは肩だからな?

しかしあやじは起きる気配すらな。

「わひわと起きあつてのつ~てこ~」
今度はでいふんで起つてゐる。

「…………ん、う~ん……」

……そんな声出でないでもりえます?はやくせん?

一緒に寝てゐるだけでも俺のしらがガリガリ削りれてゐるんですから……

「うふ?朝~?」

はやてが寝ぼけ眼の状態で田を覚ます。

「 ねせよ。ひやせは 」

俺ははやてに朝の挨拶をする。
すむとねやては……

「 (あゅつ) 」

無言で抱きついてきた。

つてうおおおおい！――！

止めて！俺の「やせむつ」なんだ！

「人の体温や……」

抱きつかれて慌てていた俺ははやての一言で言葉が出なくなつた。

そりこえははやての両親つてもつ……

止めだ止め！暗い空気は嫌こいつ言つたら――

やつ思いながりはやての頭を撫でる。

ちやんといじこめるところの意味を込めて

「 ふふつ」

撫でてことと微笑にはやてが微笑んだ気がした。

時は進み、毎となる。

結局、はやてが起きたのは11時半となってしまった。

本人曰わく……

「なんか落ち着いて眠れてもう……」

と、なんか訳のわからん言い訳をされた。

今ははやてが毎日飯を作るのを手伝つてこる。

「元春。あれ取つて?」

「「めん。どれ?」

「どれが?」

「青い蓋の奴や」

「これか……はい」

「あんがとな

「手伝つてるはずだ……。

いや、むしろ俺邪魔か?

「はやてさん? 何か俺に手伝える事は……

「へん……無いな

……どつやりキッチン内で俺が手伝える事はなかったみたいだ……

昼ご飯も完成し、テーブルに座り、はやてと向き合しながら食べ始めた。

途中であへんする?とか言われたが拒否した。

朝と昼ご飯準備の時でLPAがマイナスになつたの?こんな事したら死ねるっての……

ちなみにはやての料理は美味でした。

「飯も食い終わり、食器の片付けも済ます。

いよいよ待ちに待つた街の案内の時間。

はやても行く準備ができたのか
玄関で待っていた。

「元春? 早くしぃや?」

「おう、今行く」

そしてはやての車椅子を押して外へ出る。

外ではギラギラと太陽が輝いていた。

「さて、元春はどう行きたい?」

「そうだなあ……」

買い物の為にスーパーとか商店街とかに行きたいな……

でもそれ以外にも色々な場所も覚えたいし……

「はやてと一緒にけるとこでいいや」

「…………／＼／＼

考えるのも面倒になり、適当に答えた。
何故か後ろから見るはやての耳が赤くなつてゐるが……

とりあえず最初は近くにあるというスーパーに向かつ事にした。

向かう途中で公園や病院などの公共の場所を教えてもらつたり、
『翠屋』といつお菓子が美味しいらしい喫茶店を教えてもらつた。

そんなこんなでスーパーに到着した。

「あれ?元春?まだお醤油つてあつたつけ?」

「ん?……確かになかつた気がする」

車椅子を押しながら買い物をする。

何かそんな田常の風景が今の俺にはちよこと嬉しかった。

「あら？」兄妹きょうだいでお買い物の？微笑ましいわねえ！」

買い物をサクサクとしている

同じく買い物をしてるらしい主婦からなんか言われた。

ん～～～…… こんなのが兄でもはやてが困るよな?

卷之三

違うと言おうとしたのはやがて車椅子を押してゐ俺の手を思いつめ
り抓つてきた！？

何！？俺は何を間違えたの！？

Γ (r₁π₁(r₁π₁))

めちゃくちゃ期待した目といふか笑つてない笑顔といふか
なんかはやでがめつちや俺見てるんだが

「あら？ 兄妹じゃないの？」

今度は牛乳パックで手を叩かれたよ！？
何故に！？何故にはやはては俺の手を殴るの！？

そんな俺とはやてのやり取りを見てか、主婦は微笑みながら俺らから遠ざかっていった。

「あの～……はやてさん？」

「…………」

買い物の帰り道……はやてがわからんが拗ねていた。

はやてが俺に態度を変えたのって買い物の時だったよなあ……

何が駄目だったんだろう？

「…………なあ…………元春？」

考えてみると不意にはやはてが話しかけてきた。

「な、なんだ？はやて」

「元春は兄妹に見られたくないん？」

は？兄妹？

「私な？兄妹きょうだいに見られて嬉しかった……
元春はつひの兄さんになりたくないん？」

……ああ……あの時の事で拗ねてたのか……

でもな？

「俺なんかが兄でいいのか？」

会つたのも一緒に住み始めたのも昨日が初めてだつたし「

「別にええんよ？兄妹きょうだいつてどんなものか知りたかっただけやし……
元春が嫌なら別に……」

あるえ～？まつたく聞く耳持たへんの？
どうやらもう俺には兄になる／ならないのどちらかを選ばないとならぬいらし。

はやてはなつて欲しいらしいし、別に俺はなつてもそんな問題ない
し……

仕方ねえ……

俺ははやての頭に手をやる。

「元春？」「元兄なおとうに」えつ……？

うむ、良い具合に混乱してゐるな。

まあ、冗談は置いといて……

「兄妹がいいんだろう？ならそう呼べ」

かつこつけでそんな事を言つてみる。

「元ヒ「元兄ツ」……うん、元兄!—!」

そんなこんなではやては帰り道で「元兄、元兄!」と家に着くまで
言い続けた。
まあ、嬉しそうに言ひのやすべてに返事をした。

しかし、俺は甘かった。

これのせいではやてがあんな事をするなんて思つてもなかつた……

……

(カポンツ)

今俺は風呂に入っていた……

いやあ～お風呂つて落ちつきますよねえ～

「元兄～、頭洗つて～」

はやてと一緒に入ってなかつたら……

はいっ！朝みたいに110番しきうとしてる人！！！
言い訳つぽいがこれも俺は無実だつ！！

風呂に入らうとしたらはやてが

「一緒に入ってくれへん？」

つて上田使いで言つてきて……
でもそれには負けなかつたんだ！
それは駄田つて強く言つたんだけど……

「元兄は……うちの事……嫌いなん？」

つて泣きだしそうになつたんだよ！！！
負けたよ！昨日は車椅子でも風呂入つてたから大丈夫と思つてたら
これだよ！チキシヨーつ！！

あ、あとちゃんとお互いバスタオルは巻いてるからな！
それを条件に入るのを許可したんだから

「元兄いへ、はよして～」

「はいはー」

まあ、マジで妹つて思えば変な氣は起きねえか……

そんなこんなで大慌て（俺だけ）の風呂が終わり、就寝に入る訳なんだが……

「はやてさん…… 今日もですか？」

「え、ええやん。兄妹なんやしーーーきみうだい」

昨日は違う理由で寝かされたんですが……

反論しようとしたがはやてがすでにベットに入り左手で開いてるスペースをペチペチ叩く。

完璧にこいつに来いの命図だよね？これ……

「はあ……」

俺は諦めて、ベットに入る。

この時ははやてがめつちやーい笑顔だつた。

俺の「やはもうぶつ壊れたからもうこいや……

「そんじや、元兄。おやすみな

「ああ、おやすみ」

おやすみにおやすみの一言を言ご、眠りにつく。

ちなみに俺ははやてが熟睡した11時にやつとの思いで眠りについた。

…………明日もこんななんか？と思つと急に悲しくなつてしまつた。
けど……はやてが喜ぶなら少しくらいはいいかなあ、と思つながら
意識を睡魔に明け渡した。

第3話 八神家一団 「止めて、はやてー俺のレアはもつ無いよー?」（後編）

……俺やつひまつた?

駄文過ぎね? 飛ばし過ぎじゃね? あと変じやね?
ひつ、色々と……

さてこの幸せ主人公? をどう思つ?
俺はイラつき以外のモンが出ないや……

では気になるところが誤字、脱字や良いところ（多分無いが）がありま
したら
感想くださいませ。
では。

第4話 サヤーの誕生日…おめでとう…でもなんか腹騒がが……（前書き）

駄文ですが見てください。

あとはやでがなんかテレテレ？ですがスルーしてください。
あと2話から数日経っています。

では始まります。

第4話 はやての誕生日ーおめでとうーでもなんか胸騒がが……

「ううん……」

今、わたくし私青柳元春は喫茶翠屋でケーキを選んでいた。

何故なら今日ははやての誕生日。

仮にも兄の俺としては祝つてやらないこと禮儀で、選んでいるのだが……

「どれもどうだなー、おい」

と、じんな感じでケーキを決めないでいた。

だつてはやてにおいしいケーキをプレゼントしてあげたいじやん……

そつそえて唸つていろと……

「何かお探しでしょうか?」

店員さんに声を掛けられた。

「あ、えっと……実は妹が今日誕生日なんでケーキを買ひに来たんですけど……

オススメつてありますか?」

とりあえず聞いてみる。

悩んでも多く分決めれないし店員のオススメでいいか……

「ならこのショートケーキとかはピッタリ?」

店員がケーキに指差す。

ショートケーキか……まあ、シンプルなのもいいかな……

「ならそれをホールでください」

「はい、少々お待ちください」

そして待つこと五分。

「お待たせしました

1800円になります」

「はい」

お金を差し出し、ケーキを受け取ると

俺は店を出て行つた。

家に着くとはやてが料理を作つて待つていた。

「あの……はやて？」

「ちよつと大きめに作つたの？」

はやての作った料理は

大きめハンバーグ×3（俺の所に）
ナポリタン大盛（俺の所に）

「飯山盛り（俺の所に）

「いやあ……今日わたしの誕生日やせん？せやからあめに作つてもうひ……」

何故自分の誕生日に料理を尋常じやねー量作つて俺に食わせんだよ

そつこつはやては普通の量だし

「それとも元兄は私の料理、食べたくないん？」

はやてが涙目でこつちを見てくる

「…………食います……」

俺はそれに負けて、

「料理の山を食つてござりました……」

「ぬお～……へ、食つたど～……（がくつ）」

「なんとか一時間かけてあの量を食つてござりました。」

「食つてゐる最中、はやでがこにひつひつ見るから食べ難かつたがなんとか乗り切つた。」

「お粗末をめでした」

「こかこはやでが言つてきました。」

「まあ、はやでが良いなうが良いのだが……もつとすが腹がヤバい……」

「わやと風呂に入つて寝よ。」

「こじせじ、俺、風呂に入つて寝るかい？」

「そつまやてに去えて風呂場に行へ。」

「あ、ほんなら私も」

(ズロジー)

あまりにもむづむづと話すのではなく、口調が少しあつた。
いや、ちよ、このトト大丈夫?

「せめて、ちよっと待て」

「ん? なんや?」

「とつあえずリビングで風呂に入る準備するのは止めよつか、
まじ脱ぎかけの服を着る!」

「ふー」

初めて会つた時からこんな子だったか?

はやてが服を着てからふとそんな事を考えてしまつた。

うん、おかしくなつたのは俺が家族になつてからじゃん……

前置きでも書いてる通り、あれから数日経つてゐる。

その日からずっとこんな感じで一緒にお風呂を要求されてしまつてしまふ。

一緒に寝るのはまだ許せる(おこつ)
しかし兄としていつまでも許してられない
このせがzinと言わないと……

「なあ、はやで」

「なんや?」

「あのな? いつまでも一緒にお風呂ひていけないと思つんだ……」

「なんや?」

「な、なんでもやつて……はやでだつて年頃の女の子だし……
俺だつて健全な男なわけで……」

「……私は平氣やで……」

「止めて! 顔を赤くさせないで! ! !

「いや、はやでが平氣でも俺がなつ?」

「元兄は私と入りたくないん?」

涙田と上田使こで見つめ合ひはやで……

「わうわう……」

れあ、いじで俺の選択肢

1・はやでを突き放す。

2・一緒にいる。

1は完璧はやでを泣かせてしまつ……それは避けたい。

「はあ分これからもずっと続いてしまつ。

そなつたら俺のライフは完璧塵も残らないだろ？

「うする……俺……！」

「俺は……無力だ……」

「男つて弱いよね……」

結局一緒に入ってしまった。

はやてはにこにことして嬉しそうだが
俺は風呂上がりと思えないくらいドヨォーンとした顔をしているだ
るつ……

「はあ……ん？」

時計を見るともう〇時になりそつな時間だった。

むう……はやてを夜更かしさせるのも駄目だしもう寝るか……

「はやて、寝るやつ

「は～いっ

風呂上がりの牛乳を飲んでたのか口を白くしてはやでが来た。
仕方ないのですぐそばにあつたティッシュで口を拭いてやるとまた
はやてが顔を赤くした。

最近やけに顔を赤くするなあ……

しかし、俺はこの時少し胸騒ぎがした。

その正体がわかるのはすぐになるとも知らずに
俺ははやてと部屋に入つて行つてしまつた。

第4話 はやての誕生日…おめでとう…でもなんか胸騒がが…（後書き）

駄文過ぎるね！

さあ、次回はあの四人（うち一人は一匹と数える）が出るよ

…………文才上がる超能力が欲しいなあ…………レベル5くらいで

ではアデュー &グッバイ！

第五話 ヴォルケンズが家族入り 僕は不幸まつしぐら (前書き)

やつちまつたかのような適当っぴり……

でも見てくれる方がいるのが嬉しいです。

第五話 ヴォルケンズが家族入り 俺は不幸まつしぐら

俺は今、只今変な場面に直面しております。

「きゅー……」

横には氣を失つて倒れこんでいるはやて

そして目の前には変な黒い服を着た2人の女性と1人の女の子と
犬耳？1人の男の四人が跪いている

多分第三者が見たら

「失礼しました」

とか言いながら逃げ出すほどカオスだらう

とりあえずこれだけ言つておこう。

「なんじや 」りや……」

はやての誕生日を祝つて、そしていつものように敗北した後
いつものように寝るはずだつた。

しかし、部屋に置いてあつた時計の針が12時を指した時……事件

は起きた。

部屋が突然揺れ出し、
はやての机に飾つてあつた豪しげな本が輝き、浮きだした。

そして

と、まあこじままでの説明はこんな感じになる。

田の前で跪いているのはヴォルケンリッターといつ集団（こんな表
現で良いだろ？）らしい。

そしてここらの“主”とははやての事だろ？
あの本ははやてが物心ついた時から持つてたやつらしい、本がは
やての前で起動したのが決定的だろ？

こんな事考えていると跪いていたはずのヴォルケンリッターの赤い
髪の女の子が俺の前にいた。

「…………」「（ジー）

無言でずっと俺を見つめてくる。

何か言わなきゃ ならんのだらうか……

「おまえ、誰だ？」

「えつ？」

考へて いるといきなり 女の子が 話しかけて きた。
すると 女の子の 声を 聞いて か

「なつー? ヴィータ。 無礼だぞ」

「やうよ、ヴィータちゃん。 私達の 主か も 知れ ないのに……」

他2人 也 言葉を 発した。

男は 一切 口を 出して いない。

なるほど いの 赤い 髪の 女の子は 「ヴィータ」 つて 言つのか

「初めまして、ヴィータ。俺は 青柳 元春
訳あつて 君の主、はやての 兄を やつてる 者だ」

はやてを 指さしながら 血口紹介する

「 「 「 「 「

三人は また 黙り出して しまつた。

まあ、自己紹介は済ましたし

はやてを 介抱しに 居間へ 連れて 行くか

はやてを抱きかかえ（俗に囁ひお姫様だ）にてはやての部屋を出
ようとする

「エリへ行へ

と、部屋を出るのを

ピンクの髪の女性に遮られてしまつた。

「エリへ、居間に行くんだよ」

「何故だ。何故主を連れていく

ああ、エリ

はやてが氣絶してゐる氣づいてなかつたのか？

「氣絶してんだよ。早く起きて状況を説明しないとな

ぶつかりまつて答へ、それと同時にへと向かつた。

「エリの子が闇の書つてもんなんやね

はやてを起しつゝ、わざと状況を説明した。

以外にもはやはすんなりウォルケンズ（表の略す）を受け入

れた。

まあ、はやてなら……と思つてたし、なことひはやてがどこか嬉しそうだった。

話を聞くと、守護騎士は闇の書の主（現時点でははやて）を守るのが使命らしい

そして闇の書の主は守護騎士の衣食住を管理する必要があるりじこ（はやて談）

とつあえず面倒事ははやてに任せよう。

……手助けはするつもりだけど

「（じっかし部屋の隅で様子見てるけど色々おもしろいなあ）

はやてが住むのに必要な服を買つたためにサイズ測るつて言つたら
ポカーンとした顔になるし、今までの主はなんだつたんだよつて言
いたくなるほど面白かった。

名前もちょっと面白い。

ピンクの髪の女性はシグナム

金髪の髪の女性はシャマル

赤髪の子はさつき聞いた通りヴィータ

そして本人に聞いたが狼の耳を付けてるのがザフィーラらしい

ここつらを家族にするなんて本当にはやては面白い子だと思つた。
ただ……

「 ただ女物の買い物に狩り出されるとなるとキツイもの
がある……」

性。 サイズを測った後、 買い物に出たは良いがヴォルケンズは大体は女

つまりは女性／女の子モノの服を買うために下着やら婦人服のコーナーに行かなければならない

今の状態のヴォルケンズを連れて行くと面倒事が起るので
買い物は必然的に俺とはやでが行く事になるのだが

「でもな?人はいつか行かなならん所があるんよ?」

だからと言つてはやては俺の腕を引っ張り、下着のコーナーに引きずり込もうとする。

「いやいや、ちよい待て！ はやて！ 俺はまだ青春真っ盛りの高校生であつてだな！」

「大丈夫や、私もおるんやし……」

いてもいなくても下着コーナーは他の客から酷い眼差しが来るんだよ！

「もう、観念しいやー」

ぬおつ！？俺が引きずり込まれていいの！？

はせでのどにそんな力か……」てやういふ

「はやて！お願い！マジでまざい……」

「～～～～～」

「ぬああああつ……！」

最終的に入ってしまった……
こんな感じで俺の「ヴォルケンズ」の為の買い物は災厄な感じで始まりた。

女性客と店員の恐い眼差しを受けつつ、買い物は無事終了し、
はやての家へと帰宅し、ヴォルケンズに買った物を届けた夜……

「むりゅ～……」

俺はいつも通り風呂に入っていた。

さすがに、ヴォルケンズという新しい家族ができたのだから
一緒に入るのを自重してくれと言つたらふくれつ面になりつつも諦
めてくれた

「はあ～、一人で風呂つて何でこんなに気持ちいいんだう！」

そんな事を、ぶつぶつ言つていると

「……ううて、まづ……」

「え……から……か……」

ドアの向いからはやてどヴィータの声が聞こえた。
何か嫌な予感が……

「おひじやまつしま～す」

思いつきつ当たりた

はやてがヴィータにおんぶしてもらいながら（ヴィータは大丈夫な
のか？）

ドアを開けて入ってきた。

しかも身につけてるのは2人ともバスタオル一枚

「え、ちょ、何で」

諦めたと思っていたのにと茫然としていると

「だつて……我慢できひんかったんや」

「はやてがどうしてもつて／＼／＼

はやては訳のわからん事を言い、ヴィータは顔を赤くして理由を述べた。

この後は仕方なく入ったが

後からシグナムに思いつきり制裁を何故か受けてしまった。

とうあえずこれだけ言わせてくれ……

「不幸だ〜〜〜！！！」

そんな言葉がハ神家に響いた。

第五話 ヴォルケンズが家族入り 僕は不幸まつしぐら (後書き)

適當過ぎますよね！？これ！

笑えばいいじゃない！

もう高らかに！見下すように！

あ～っはっはっはっはっはwww

……つて自虐はこの辺りにして
感想がございましたらください。

第6話　八神家の日常　あれ…………平和かも…………（前書き）

久しぶりの投稿です。
見てもらえたなら幸いです。

第6話　八神家の日常 あれ……平和かも……

俺、青柳元春は今窮地に陥っていた……

「さあ、覚悟しろー元春！」

まさかのシグナムに

剣道とかでよく見かける木刀を向けられていた。

いつも思つ……

どうしてこうなった……

発端は、ヴォルケンズが八神家に住んで
数日経つた朝……

珍しく早く起きた俺は
たまにははやての代わりに朝食を作り、つと
着替えてキッチンに向かっていた。

「ん？」

居間にいると外から素振りの音が聞こえる。

カーテンを開けると、

「む、元春か……今日は珍しく早いのだな……」

シグナムが木刀を持つて素振りをしていた。

「そういうシグナムも早いんだな」

「私はいつもこの時間には素振りしている」

時間を確認すると6時12分くらいだった。

着替えて歯を磨いて髪を整える時間を考えると
シグナムは大体5時45分くらいに起きているんだろう。

いつもの俺には絶対無理だ。

「今日ははやての代わりに朝食作るのと思つただけど、
シグナムは何がいい？」

「主と同じものを頼む」

「いや、できればシグナムの意見を聞きたいな……」

「特に無いな」

即答しやがった……

少しくらい考える動作が欲しかった……

「んじや、焼き魚定食みたいなの作るか……」

俺はキッチンに入り、
シグナムは素振りを再開した。

数十分後

味噌汁を作っていると
はやてが起きてきた。

「おはよう。元兄」

「おはよう、はやて。
もう少しで朝食できるから待ってね」

「あれ？元兄って料理作れたん？」

「ある程度は作れる。
ただレパートリーはあんまり無いし、
はやての料理の方が旨いから普段作らないだけ」

転生前はよく家庭の事情で朝晩と飯は自分で作って食べてたからな
そこそこははずだ

「楽しみやな～。元兄のじはん」

「あんまり期待するなよ？」

はやてがキッチンを出ると今度は、ヴィータが入ってきた。

寝ぼけてこらのフリフリしている。

「おあよ……」

「訂正。完全に寝ぼけている。

「ヴィータ、眠いなら無理せず寝てこい。」

朝食はもうすぐできるナ、お前の分は暖め直してやるか?」

「わかった……ふあ……」

コップを取り出し、牛乳を注いで飲んでから
寝室に戻つていった。

朝食が出来上がる頃には、ヴィータ以外みんな起きていた。

朝食は焼き魚(鮭)と味噌汁とご飯。
定番の朝食だ。

それをテーブルに並べてみんなはそれぞれ指定の椅子に座る。
(はやては車椅子だから座るという表現はおかしいかな?)

ザフィーラの朝食は

『猫まんま』といつ味噌汁にご飯を入れ、お粥っぽくしたものだ。

それに鮑をぐりゅぐりゅして入れた。

「それじゃ、いただきますー！」

その一言でハ神家の一日が始まった

「わいと…………何しよい…………」

朝食を終えた後、

「止づけは私がやるから元気は休んでて

と、はやてが言つてくれたので
部屋でじるじるしていた。

うーん…………

洗濯はシャマルさんがあつていろし、
お風呂掃除も昨日の深夜にしておいたし……

なら朝風呂にでも入るかな。

いつも風呂となると
はやてが入ろうとしてくるからな
たまには一人で入りたい……

そう思つていると

いつの間にかお風呂の湯を入れていた
無意識つて怖いな……

「ん？ もう風呂にするのか？」

不意にシグナムが話しかけてきた。

「いや、入りたいな、って思つてたらいつの間にか入れてた」

「……そ、うか、なら私も入るとしよう。
素振りをしている時に少し汗を搔いたからな」

「別にいいけど……

最初は俺だぞ？」

「なんだと……」

シグナムが俺を睨んできた。

あれ！？俺なんか言つたっけ！？

「私は汗を早く流したいんだ。だから譲つてくれ」

ああ、シグナムは最初に入りたいのか

確かに風呂はいつもシグナムが最初に入つてた気がする。

よし、なら……

「 断る」

「 なつー!?」

いつも最初に入つてゐるならたまには譲つて欲しい。
それにはやても食器の片づけをしているから
まつたりと入るのは今しかない!!

「 な、なら私と勝負しろー! 元春が勝つたら風呂は譲つてやるー!」

「 おしつ、乗つた!」

負けても恨むんぢゃないぜ?」

そして冒頭のようになる。

場所は庭で、

勝負の内容は『先に一撃を当てた方が勝ち』
といつづルールになつた。

武器は木刀のみで
庭からは出れないルールも取り付けた。

「では行くぞっ！」

そしてシグナムとのバトルが始まった。

うん。

今更ながらめっちゃ後悔してる。

だって剣術でシグナムに勝てるわけないもん

風呂は譲れば良かつたとしみじみ思いながら

俺は木刀を構えた。

第6話　八神家の日常 あれ……平和かも……（後書き）

元春に平和などあるものか つ――

次回はバトルの回です。

早くスピリット出れないとな――……

では感想や指摘がございましたらください。
では――

シグナムと勝負ー?なら.....エスケープー! (前書き)

更新遅れています! せん!

理由は色々ありますですがすいません。

では、「覗くだわ」。

シグナムと勝負！？なら.....エスケープ！！

木刀を構え、突っ込んでくるシグナムから俺は必死に逃げていた。

いや、スタコラサッサの方じやなくて
とある最強の弟子みたいにかわしてるだけだよ？

「つて、うわっ！？シグナム！今本氣で仕留めるよ！」
シャツがちょっと破けたぞ！？」

「私はいつでも本氣だ！元春！
逃げてないでお前も覚悟を決めろ！..」

なんの覚悟をしろって言ひんじや！..
死か！？死ぬ覚悟しろって言ひうのか！？

つか、最初の頃とキャラ変わつてませんか！？

「はあっ！」

「ぬおっ！？」

シグナムが振り上げた木刀を避けたら
転げてしまった。

やばっ！

シグナムが不適に笑い、木刀を振り上げる。
すぐさま立ち上がるが避けるまでは間に合わない。

仕方ない……
こうなつたら

「はつ……」

シグナムが木刀を振り下ろす。
俺が避ける事ができないのを確信したのか
勝利の笑みを浮かべる

だがしかしつ……

「なん、と つ……」

ガンつといい音と共に
木刀と木刀がぶつかり合つた。

「なつ……？」

勝利を確信していたのかシグナムは驚きを隠せない様子だ。

うん。防いだ俺が一番驚いてる……
まさかマジで防げるとは思つてなかつた。

俺は一寸距離を取り、構える。

このままじゃ終わる気がしない……ダメ元でやつてみ
るか……

「たあつ……」

俺は木刀を前に突き出し、シグナムに突っ込む。
それをシグナムはひらりとかわす。

ですよね

素人の剣がシグナムに当たるはず無いって……

「ようやくやる気になつたか……

では行くぞ……！」

「つー？」

シグナムの剣捌きが再び俺に襲いかかる。

攻撃がまつたく田では確認できない。

とある赤い機体に乗つた仮面の男のように見えるようになる訳も無く
すべて勘でギリギリかわすのが精一杯だった。

だがかわしてもシグナムの攻撃は止まらない。

「はあああああああつ……！」

「当たらなければどうという事はない……！」

と言いつつ本当に当たるか当たらないかの境田で、
いつ攻撃を当てられるかビクビクしていた。

「また逃げ腰になつてているぞ！たあつ……！」

逃げ腰じゃない！逃げているんだ……！」

「あくしょひ……かわすだけで精一杯なんだが……」威張つて言ひ事じやないけどね～

「あくしょひ……かわすだけで精一杯なんだが……」

「ならおとなしくやられりー。」

「だけどー。それでもー守りたいもの（一人の入浴時間）があるんだあああー！」

こんな感じで勝負は大体昼夜まで続いた。
ずっとかわしたり、木刀振り回したりで動きまわっていて体力の限界だった。

……えつと？朝から始めたから……計5時間もやつたのか

「そりゃ…………疲れるよな…………」

「何を、言つていろ…………はあはあ…………私は…………まだ、やれるぞ…………はあはあ」

息切れ起こして何言つてやがりますか。

無理しないで休めよ…………その間に一発がますから

「ていうか、何で俺が、こんな事、してるんだつけ？…………はあ

「それは……何だつたろうか?」

お互い忘れたらしい……ホントに何で勝負してたんだっけ?
意識が朦朧として思い出せない。

「元兄いー、シグナムー、お昼出来たでー」

うーんと唸っているとはやてがナイスタイミングでお昼を知らせて
くれた。

「おおー!今行く。」

とりあえず何が原因か思い出せないが終わるぜ?」

「そりだな。主も呼んでいる事だし……」

そんなこんなで俺とシグナムの勝負は幕を閉じた。

余談だがお昼を食つた後に汗を流す為に風呂に入ろうとして
すでに風呂を入れていた事を思い出した。ついでに勝負の理由も。
勝負の理由を思い出した俺は風呂に入らず、真っ先にシグナムに風
呂を譲つた。

忘れていたシグナムが思いだしてまた

「勝負だ!」

とか言われない為に。

シグナムと勝負ー?なり…………エスケープー? (後書き)

まさかのじぶなオチとは……

わざと面白にオチを考える事に専念したいです (トトト)

ではこんな駄文を見ていただいてありがとうございますー。

感想や指摘がございましたらどうぞどうぞお聞かせください

料理にチャレンジ 作るのは殺人シェフ！？（前書き）

ケータイで書いたので変かも知れません。

とある事が終わり次第、編集します

料理にチャレンジ 作るのは殺人シェフ！？

「…………」

あつ、どうも

ハ神家のお兄ちゃん、青柳元春です

実はですね？とある人が料理がしたいと言ったのでみんなが散歩に出掛けた時に作らせてみました。

見た目は普通で美味しそうだった。

そして俺が試食してみたんです。
そして…………

「あれ？俺の体が何でそこにあるの～？あはははは～…………」

「大変！元春くんが白由を向いて咳をだしちゃったー！」

シャマルさんが何か言つてゐる…………

あ～～、ちょっと体が軽くなつた気がする…………

何でこいつなつたんだら？

ただシャマルさんに田玉焼きを作つてもらつただけなのに…………

なんとかシャマルさんに介抱され、なんとか一度目の人生終了は免
れた。

マジでどうせつたらあんな田玉焼きが作れるんだ

「！」みんなさー。元春くん……」

「大丈夫です。まだちょっとクラクラするけど

悪気はないんだよな

でも料理ヘタの域を越えてるのが怖い

「私…………料理向いて無いのかしら…………」

悲しそうに俯き、シャマルさんが呟く。

…………料理してゐる時のシャマルさんは楽しそうだつたから
止めさせたくないんだよなあ…………

よしぃー！

「特訓しましょー！」

「えつ？」

シャマルさんが顔を上げ、俺に涙田で視線を向ける

なんでも興味を持つのは良いことだ。

それをへタだからといつ理由でやめるのは勿体無い。

「へタだからやめるのは駄目だと想いますよ？」

ならこいつそのこと頑張つてしまでも駄目なら諦めましょう。う~ねつ~

俺は笑顔で手をさしのへる。

「でもそれじゃあまた元春くんが…………」

「大丈夫です。その時はまたシャマルさんが介抱してください……」

ホントは怖いけど

少しきらは体を張つて手助けしなきや！

「あ、ありがとうございます」

シャマルさんは微笑んで、俺のさしのべた手を掴んだ。

……「これは頑張らないとな……

俺は覚悟を決めてキッキンに身を投じた。

それから俺は何度も玉子焼きを食べ、死にかけた。

「…………」

「…………」

「「」」

「きやああああー元春くんー」

な、何故だつーー

となりでずつと見ていたが変なものは入つてなかつたはずだーー
なのに……玉子焼きがすゞくマズい…………

「まだだつ…………まだ俺は氣絶しちゃこないーー」

「元春くん…………」

「さあ、作るんだ……諦めずに…………」

「…………わかつたわ。

死なないでね…………」

死んでたまるか…………

こんな事で俺は死なないつーー

その度にシャマルさんに介抱され、命を救われた。

シャマルさんは何回か諦めようとしたが……

「自分がやつて楽しいことをできないからつて投げ出すのは駄目だ」

と、説得し続けチャレンジさせた。

「できました……」

そして最後の卵を使った今までのと形が同じ玉子焼きが運ばれてきた……

玉子焼きを皿の前にし、今度は大丈夫か?と不安になってしまひ……

そんな覚悟で大丈夫か?

俺の中の何かが聞いてきた気がした。

……答えは決まってるだろ?

こんな質問が来たときの答えは……

「大丈夫だ。問題無い。(パクつ)」

俺は玉子焼きを口に含んだ。

「……」

「…………」

「…………あ、美味しい…………」

「ホントに？！？」

今までの玉子焼きと違い、
普通に美味しい玉子焼きだった。

俺はガツガツと平らげシャマルさんに一言

「『ちそつ』をました」

作ってくれた人への感謝の言葉を告げた。

「上手くいったみたいで良かったわ」

「諦めなくて良かったでしょ？」

特訓が終わった後、

俺達は使ったものを片付けていた。

俺が美味しいと言つてから

シャルマルさんはずと笑顔だ。

「ナリハ、あつがとうーー元春くーー。」

良かつた。

シャルマルさんに好きな事ができて本当に良かつた。

「ただいまーー」

おつと、せやて達が帰つてきたよつだ。

「えじや、俺は部屋で寝てるから。

はやて達が玉子焼きを作つてやつてみれ?」

「うふ。ナリしてあるな」

シャルマルさんの返事を聞いて俺は部屋に向かつ。

向かつ途中でせやて

「疲れたから部屋で寝てるよ

とおひて、部屋に向かつた。

部屋に着くと俺は口直しに置つておこたー〇ヽヽ〇を食へる。

「…………あれ?」

……味が……しない?

おかしいな?と思いつつ、もう一口

やつぱり味がしない……

何故だ?

考えるとある説が思い浮かぶ。

もし、シャマルさんの料理を食べ続けて味覚が麻痺していたとした
ら?

「つーはやは達が危ない!」

俺は部屋を飛び出し、

居間へと向かう。

「元春くん…………みんな、私の玉子焼きを食べたら倒れちゃった……」

居間に急いで入ると

シャマルさんは涙目になり、

みんなはテーブルに突っ伏していた。

「…………はあ……」

俺は色々な事に呆れ、
ため息しかでなかつた

その後、シャマルさんは料理をする事を禁じられてしまつた。

はやて曰わく
「キッチンに入れなくなるよう増やさへ
とのこと

……可哀想であるのだが、はやてが留守の時で
一緒に作りつゝ細々。

とつあえず、ひどこでひつあつ
今日だつた

料理にチャレンジ 作るのは殺人シェフ！？（後書き）

読んでいただきありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5619v/>

魔法少女リリカルなのは 転生したのはスピリット！？

2011年11月30日15時47分発行